12月19日：届かぬ高みに手を伸ばすための美麗字句

◇

イレベンタル。王国騒乱が巻き起こす風が吹き荒れる範囲に含まれながらも、激戦区からは離れているが故にそこまでの騒々しさは無い街。そんなイレベンタルに今、二人のプレイヤーがいた。

「ハジメマシテ、でいいのかしら？」

「ええ。直接会うのはこれが初めてですね………アージェンアウルさん」

この邂逅を望んだ男がこの邂逅を承諾した女へと声をかける。

それは裏切りの報酬、男はただこの一瞬の為に己が陣営の情報を売り渡したのだ。

「私と戦う為だけに色々やった、って聞いてるけど？」

「ええ、まぁ………」

男はふ、と苦笑する。自分がこの状況に至るまでにしたこと………きっとそれは彼女の”美学”に反する事だろう。あるいはその”美学”故に自分のような行いも許容するのか………果たして、眼前の女性はそれを責めるでもなく、さりとて褒めるでもなくただ何故？とばかりに首を傾げていた。

「ケイと知り合いなんでしょ？ だったら普通にプライベートマッチにでも誘ってくれればいいのに」

至極真っ当な疑問だった。魚臣慧(オイカッツォ)との接点があるというなら、わざわざ非格闘ゲームであるシャングリラ・フロンティアでの1対1を望む必要はない。今最もホットなギャラクシア・ヒーローズ：カオスであれ、その前作であるバーストであれ、格闘ゲームで戦えばいい。

「………GH:Bの日本ランキングを知ってますか？」

「……？ええ、もちろん知ってるわ」

ゲーム内におけるレートマッチの戦績ではなく、オフィシャルな大会の戦績に基づいたランキング。何故その話題を出すのか？ とさらに疑問符を浮かべるアージェンアウルだったが、男はそれこそが疑問に対する答えなのだとばかりに答えを続ける。

「世界大会の出場条件は日本ランキングベスト８以上………自分の最高戦績は二年前の八位。一回だけギリギリで滑り込めたのが最後です」

アージェンアウル………あるいは、格闘ゲームプ(シルヴィア・)ロの頂点たる女(ゴールドバーグ)は目の前の男……カイソク(改崎速手)の情報を思い出す。

改崎(カイサキ) 速手(ハヤテ)。日本で活動するプロゲーマー、活動種目は格闘ゲーム……その中でも特にギャラクシア・ヒーローズシリーズをメインとしている。活動期間は………初代ギャラクシア・ヒーローズである「Ａ(アタック)」の頃には活動していたはず、つまり最低でも十年以上はプロゲーマーとして活動しているベテランという事だ。そしてその戦績は本人を前に考えるのも少々失礼だが、とほんの少しだけ息を吐きつつ口を開く。

「そうね、平均(アベレージ)は十位前後……ここ数年は二年前以外だと十一位以降の方が多かったわね」

「ははは………”１”だけ覚えておけばいい貴女と違って、結構バラけてるんですが……覚えてもらっていて光栄というかなんというか」

だからですかね、とカイソクは深いため息をついた。それは世界最強と名高いプレイヤーに自分の戦績をきっちり記憶されていたことに対する恥じらい以上に……重く積もったものが込められていた。周囲を見渡し、他にプレイヤーがいないことを確かめた上でカイソクはその名を口にした。

「シルヴィア・ゴールドバーグ。貴女に憧れない格ゲーマーはいない」

「バッドマナーね、別にいいけど……それはどうも？」

「貴女がデビューする以前に、「絶対王者」なんて看板を本気で掲げられる奴はいなかった……まさしく、絶対に勝つヒーローだ」

シルヴィア・ゴールドバーグが本格的にプロゲーミングの世界にデビューした時、「そこで時代が変わった」とまで言われる最強の格闘ゲーマー。

誰もが目指し、手を伸ばした一等星。だが……人の手は無限に伸びはしない、一等星に手が届くのは、その近くまで到達できる者だけなのだ。

「誰だって貴女とのマッチングを夢見てきた、貴女に勝つことを目指してきた。だけどね……やっぱり、越えられない壁ってものは確かにある」

二年前の世界大会、アージェンアウル(シルヴィア)はその内容を思い出す。記憶が間違っていなければ、その時自分は目の前の男とは対戦していない。確か……そう、思い出した。

「確か………ええ、そう。貴方は初戦でアメリアと……」

「お恥ずかしながら、コテンパンにされましたよ」

もし決勝まで上がってくるならこの中の誰かだろうと彼女が予想していた一人、"宿敵(ライバル)"ならずとも"好敵手(ライバル)"ではあるアメリア・サリヴァンが一回戦で撃破したのが確か彼であったはず。そしてそれはカイソク自身が肯定した。

「あるいは、トーナメントで運良く貴女と当たることはあるかもしれない。でもそれは……もう、ただの宝くじだろう？」

それに、とカイソクは寂しげな笑みを浮かべた。

「ずっとやってると分かる事もある。自分の全盛期をもうとっくに過ぎた事とか………ね」

それはベテランゲーマーの嘆きだった。全盛の時期を過ぎ、あとはただ衰えゆく事を自覚してしまった事への。

それは避けられない事だ。人は衰える、それは脳とて例外ではない。幼子から老人まで同じフィジカルを得られる電脳の世界であっても反射神経には大きな隔たりがある。

「シャンフロ(ここ)を選んだのは……プロゲーマー改崎速手としての最後のプライド、かな。知り合いのツテがあるからと……誰もが目指した貴女への挑戦権を、格闘ゲームで得るのだけは許せない。そんなちっぽけなプライドだ」

千載一遇のチャンスは既に逃した、きっと次は無い。

この対面が知り合いのツテによるただの幸運だとしても、せめて格ゲー以外で。

「成る程ね」

気持ちは分からないこともない(・・・・・・・・・・)。

故に。

「じゃあ、やりましょうか」

アージェンアウルはカイソクを一切の遠慮なく、手加減なく、徹底的に、完膚無きまでにぶちのめす事にした。

漢字二文字で済む言葉を長い文章にする天才カイソク